野想忌

～野を想う、野に想う

二〇一八年三月十三日に永眠した内田康夫の命日の名称（文学忌）が**「野想忌」**に決まりました。決定までの経緯をご報告いたします。

内田康夫夫人である早坂真紀と、内田康夫財団事務局とで何度か話し合いの場をもち、始めに「代表作から名付けたらどうか」、「名前をそのまま付けてはどうか」などの案が挙がりました。ですが以前、「内田康夫の代表作といえば？」というアンケートを実施した際、ファンの方々の声が分かれたこと、また、「内田忌」や「康夫忌」では、内田ならきっと『恥ずかしいから嫌だよ』と言うだろうと、見送ることになりました。

その後早坂から、内田が以前、雑談の中で「野草？　康夫ならここにいるよ」と得意の駄洒落を披露した話があり、「康夫忌」改め「野草忌」という案が出ました。また、「野草」に関連して早坂は「センセは常々、自分は華々しい文壇の世界を、外側から見ているようだと言っていたのよね。憧れていた世界に自分も立っているはずなのに、なぜかいつも煌びやかに咲く花々を、野に立って眺めているような心境だったみたいよ」とも言いました。

そして「野草」という文字から、内田康夫の俳句に話題が及びました。それは、浅見光彦倶楽部（「浅見光彦友の会」の前身）の会報「浅見ジャーナル」に掲載していた直筆「今号の一句」についてです。二〇〇一年から内田が体調を崩す二〇一五年の七月まで掲載した、その最後の句が**〔草笛や蒼穹の道を孤り往く〕**というものでした。実はこの句には別バージョンがあり、それは内田が「これは事務局で保存しておくように」と置いていった次の句です。

この短冊には「野」と「草」の二文字が入っています。何か運命的な感慨も抱きつつ、文学忌は「野草忌」がよいのでは――と、一旦は決まりかけましたが、そこで早坂がふと、「『やそう』には『夜想曲』の『夜想』もあるのよね……」と、寂しげに呟きました。実は、記念館に献花に訪れた古い友人が弾いてくれた、ショパンの夜想曲20番「遺作」を聴き、人前では泣かないと決めていた早坂が、大粒の涙を零したことがありました。

「夜想忌」というのも、ピアノが好きだった内田らしい名称かもしれないと、また新たな案が持ち上がりました。

これまでの案も常にその視点で検討を重ねましたが、ここでもやはり内田康夫ならどうするかという話になりました。内田なら、どちらでもなく、新しい言葉を作るのではないか。例えばそれは、作品名にも現れています。『贄門島』、『棄霊島』、『幻香』、『霊霊』、そして『孤道』。どれも内田による造語です。そこで、「野草」でも「夜想」でもなく、「野を想う、野に想う」と書いて「野想」。これが一番内田らしいのではと、早坂と事務局とで意見が一致し、後に内田康夫財団の理事会・評議員会での承認を得て、内田の文学忌が正式に決定いたしました。

日本中を舞台に多くの小説を執筆してきた内田康夫。懐かしい地を巡り、新しい場所を目指し、今もきっと旅を続けています。

野を想えば浮かぶ舞台地の風景。
野に想えばよみがえる物語の一場面。

三月十三日は皆様それぞれの場所で、作品に描かれた景色や登場人物たちを思い返しながら、内田康夫へも一時、想いを馳せてほしい。「野想忌」にはそんな願いも込めています。

内田康夫財団事務局